

第17回アートフィルム・フェスティバル

会 期：2012年12月4日(火)～16日(日) *10日(月)休館 [12日間開催]

会 場：アートスペースA

「アートフィルム・フェスティバル」は、映像表現の先端的な動向を、既存のジャンル区分に捕らわれない横断的な、独自の視点から作品をセレクトする、特集形式の上映会で、この地域において、商業ベースでは上映される機会の少ない実験映画やビデオ・アート、ドキュメンタリー、自主制作映画などの表現に触れることが出来る、貴重な機会として支持を得ている。

「フランス・ドキュメンタリー・セレクション2012」は、アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会の協力により、アンスティチュ・フランセが所蔵する近年の優れたドキュメンタリーを特集するもので、アート系ドキュメンタリーに焦点を絞り、充実した内容となった。その多くがフランス語作品で、英語字幕版という、観客にとって馴染み難い点があるものの、アートを題材にしているため画面を追うだけでもある程度の理解は可能であり、この企画を目的にくり返し会場を訪れる、熱心な観客の姿が目立った。

「松本俊夫『蠅螂の斧』三部作一挙上映+初期ビデオ・アート探求」では、日本における実験映画のパイオニア松本俊夫を監修に迎え、オムニバス映画の新たな可能性を追求しようという企画「蠅螂の斧」三部作が完結したことを受け、3作品を一挙上映するとともに、日本の初期ビデオ・アートを歴史的に検証する、他に類例のない映像作品、瀧健太郎『キカイデミルコトー日本のビデオアートの先駆者たちー』(2011年)を初公開した。また、愛知県文化情報センターが所蔵する『モナ・リザ』(1973年)などの松本作品も上映したが、相乗効果を生んでか、何度か上映しているにもかかわらず、新たな観客を開拓できた。

「オリジナル映像作品・牧野貴『Generator』アンコール+『2012』ライブ上映」は、『Generator』で「第41回ロッテルダム国際映画祭」タイガーアワード(最高賞)を受賞した牧野が、今年新たに挑んでいるライブ上映作品『2012』(2012年)を初公開した。牧野と共に、この上映のためにスピーカーをセットし直すなどの準備をほぼ一日掛かりで行い、理想的な音響で上映が実現し、観客の満足度も高かった。

愛知県美術館との連携企画として、「生誕150年記念 クリムト 黄金の騎士をめぐる物語」展に先立つ形で、ラウル・ルイス監督『クリムト』(2006年)の特別上映も行った。クリムトの生涯を伝記的にたどるのではなく、監督独自のクリムト像を映像で展開した。この作品は、そのためにやや難解と受け止められる向きもあったが、会期中で最大の集客となる82名を数える結果となった。

全会期の締めくくりとして、昨年度制作したオリジナル映像作品の最新作となる、森弘治『Case Study』(2012年、シリーズ第21弾)のプレミア上映を行った。森はこれまでインスタレーション形式で自作を発表しており、通常の上映形式をほとんど取ったことがないため、当日は森のレクチャーという形で、旧作を参考上映しつつ本作品を公開した。客席からは、この作品が探求しているトラウマ(心的外傷)について踏み込んだ質問が出るなど、好反応であった。